

はじめまして



## NPO 法人 Annaka ひだまりマルシェ

代表理事 神戸るみ

はじめまして。私は、NPO 法人 Annaka ひだまりマルシェの神戸るみと申します。

ひだまりマルシェは5年前の3.11をきっかけに始まった市民活動「放射能から子どもを守ろう安中の会」が前身となっています。この1年間の市民活動については、当時の私たちの率直な思いなどをまとめた活動記録及び同会会報をもとにいたします。

### 「放射能から子どもを守ろう

#### 安中の会」設立の経緯

(活動記録より転記)

2011年3月11日東日本大震災が起き、それを契機とした福島第一原発事故によって私たちの住む安中市にも放射性物質が飛来しました。安中市は同年12月、環境省の定める汚染状況重点調査地域の指定を受け、放射能の知識を全く持ち合わせていない私たちの生活は一変、放射能を気にしながらの生活となりました。

しかし、事故後、私たちの前に現れた専門家と言われる人たちの発言は「笑っていれば大丈夫！心配のし過ぎはかえって身体に悪い」という楽観論から「安全とは言えないのではないか」という慎重論、「すぐに避難すべき」という極端論まで様々で、どの情報を信じればよいのか分からない、という状況でした。

専門家の発言にはその人たちが置かれている社会的立場が大きく関わっており、心から子どもたちのために発言しているのは誰なの

か、ということを私たち自身が見極める力を持つことの必要性を痛感しました。そこで私たちは、まずは放射能について知ることから始めました。

2012年3月に第一回目の学習会を開催し、翌4月21日、「放射能から子どもを守ろう安中の会」は結成されました。(転記終わり)

### 無知だった私

3.11当時、娘たちは3才と生まれて2か月でしたが、お恥ずかしいことに放射能についての知識が皆無であった私は、この二人の娘に無用の被曝をさせてしまいました。自分の無知によって子どもたちを守れないことがあると痛いほど実感したこの日、もう同じことはしないと子どもたちに約束し、それ以降、できることを積み重ね、今に至ります。

1年の市民活動を経てNPO法人化し、現在3年目となるひだまりマルシェは、「私たちはあなたを大切に守っていきます」という子どもたちへのメッセージを伝える場であり、いじめや貧困など子どもたちを取り巻く社会環境という広い視点においても、私たちの存在意義を日々実感しています。

### 1年間の活動で見えたもの

<当時、除染が遅々として進まない安中市において、せめて保育園や幼稚園などの子どもたちが集う場だけでも除染をという働きかけを行っていました>

(会報NO.5より転記)

『国が、県が、園長が安全だというから安全だ』というのではなく、私たち一人ひとりが責任をもって、子どもたちにとってそれでいいのか、という自問をし、皆でよりよい方

向を話し合うこと、そしてそういう姿を子どもたちに見せることが、今私たちにとって必要なのではないのでしょうか。除染をする、という結果もちろん大事ですが、それ以上にそこに至るまでのプロセスが私たちにとっては必要なのです。目の前にある見えない放射能に目を凝らすということは、放射能問題にとどまらず、私たちの“今まで”と“これから”を見つめ直すことに他なりません。

(転記終わり)

…NPO 法人 Annaka ひだまりマルシェは「皆でより良い方向を話し合う」場所として、様々な座談会や意見交換会、イベントなどを実施しています。

## これから

(2013年11月15日付日経新聞一面の「春秋」欄 引用始まり)

そして「戦後」が終わり「災後」が始まる。

東日本大震災の直後、この国難は新時代の出発点になると説いたのは政治学者の御厨<sup>みくりや</sup>貴<sup>たかし</sup>だった。巨大地震と原子力災害。強烈な共通体験を持った日本は転換期を迎え、新しい価値観の社会が生まれるという指摘である。

「災後」なる言葉はさほど広がらず、戦後のなざまざまなシステムは命脈を保っている。御厨氏の期待は裏切られたのかもしれない。しかし目を凝らせば世の中では「災前」にはあり得なかったことも起きている。

思えば3.11からまだ2年8ヵ月、「戦後」が始まった8.15からの時間経過になぞらえると1948年の春先ということになる。そういう混乱期だとすれば試行錯誤も当然で、行きつ戻りつ、この国は「災後」の像を探し求めている最中だといえる。もっと激しく、もっと熱く意見をたたかわせて見える道もあるだろう。

(引用終わり)

…3.11から5年。私たちは、よりよい「災後」を探すために、熱く意見をたたかわせてきた

だろうか。目先の忙しさに目を奪われ、足元をすくわれてはいないだろうか。

いま改めて内省するとともに、私たち自身が「災後」を形作る当事者であることを心に刻んでいきます。

2016年度、私たちは、いろいろな方のご協力のもと『小児甲状腺エコー検査』事業を実施します。そしてこの事業を通して、ひだまりマルシェの活動の原点である3.11を改めて見つめる1年にしていきます。

子どもたちの傍らで、大人たちが議論を通じてよりよい方向を見出す。それこそが全ての始まりであり、そこからしか何も始まらない。そう思います。

## 貴重な機会

この度、ひだまりマルシェの発足やその後の歩みをお伝えできる場をいただき、改めて私どものこれまでの活動を振り返ることができました。貴重な機会をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

